ディネの国から —ナバホの子どもたちとわたし—

エイムズ唯子

第７回「それぞれの、星条旗」

７月４日（4th of July）は、アメリカ合衆国の独立記念日。作家の須賀敦子さんが「赤と空色に星がちらばった、あの妙にはしゃいだような国旗」（『遠い朝の本たち』、ちくま文庫）と形容した星条旗が町を席巻する国民の祝日ですが、勤めを休める人ばかりではありません。夫の父が作ったという、「4th of Tube-ly」と白い塗料で書かれた鉄のオブジェを見せてもらったのは、日本に住んでいたころでした。鋼鉄管（チューブ）を製造する企業で、エンジニアとして働いていた義父は、毎年７月４日に出勤しなければなりませんでした。ある年の７月４日に、皮肉をこめて勤務中に作ったというこの作品は、厚みにして５ミリほどのどっしりした鋼の筒を切り出し、風にはためく星条旗を丸い側面で写しとっています。

「バカンスをきっちりと取る欧米人にくらべて、日本人は働き過ぎ」と聞かされていましたが、それはヨーロッパとの比較の話。アメリカの労働者が文句なしに休める祝日は、11月のサンクスギビング（感謝祭）とクリスマスだけと、そのとき知ったのでした。

そんなお国柄では、６月と７月のまる２ヶ月が夏休みとなる教員が白い目でみられてしまうのも仕方ないと、世間様から隠れるようにして読んでいるのは、『わが魂を聖地に埋めよ－アメリカン・インディアン闘争史』（ディー・ブラウン著、鈴木主税訳、草思社）。アメリカ先住民の歴史をとりあげた書籍は多くありますが、歴史にくわしい夫が薦めてくれたのは、条約会議の速記録に残された、先住民の酋長たちと合衆国将軍らの肉声を基に書かれたこの本でした。事実を直視しようとすればいちどに少しずつしか進めないこの歴史書は、合衆国の旗をめぐる不名誉な過去も伝えています。内陸部でバッファローを狩り、半農生活をしていたシャイアン族の長、ブラック・ケトル（黒い薬缶）は、1863年にワシントンに招かれ、リンカーン大統領らから勲章と合衆国の旗を贈られました。酋長は、その旗を掲げるかぎり、兵隊は決して発砲しないとの約束とともに旗を持ち帰り、誇らしげに自分のティピー（平原インディアンが用いた住居用テント）に掲げていたそうです。しかし、ワシントンから遠く離れたフロンティアで指揮をとっていたシヴィングストン大佐は、「神の支配するこの世界では、どんなやり方でインディアンを殺そうとも、それは当然の権利であり、名誉あることだ」（上巻162頁）と信じて疑いませんでした。そして、白旗とともに掲げられた合衆国の旗の下で仁王立ちになり、逃げまどう部族のひとびとに「恐れるな」と呼びかけるブラック・ケトルの村を二方向からはさみうちにして、無差別に襲撃したのです（サンド・クリークの虐殺）。

アメリカ先住民の歴史を知っておかなければ、とまなじりを決して本を読みはじめた春先、夫の提案で、『シェーン』という西部劇を家族で観ました。舞台は、ワイオミング州（州都：シャイアン）。流れ者のシェーンと開拓者の家族の物語です。先住民に対し、白人が極限まで残虐で不誠実だったのは真実であるけれど、開拓者たちもまた、地に這いつくばって、生きようとしていた、そのことも知っておいて、と夫は言いたかったようでした。義両親は、開拓の時代を生きのびた祖先から、夫に命をつないでくれました。わたしも、先住民を騙し、武力で追い払って造った鉄道や道路の恩恵を受けずに、星条旗の下に生きられる日は一日としてないのです。